農村の景観をまもるとは
愛媛県内子町での講話より

横張（よこはり） 真（まこと）
東京大学大学院
新領域創成科学研究科教授

景観を考える三つの立場

「景観」という言葉を巡っては、三つの立場があると思っています。一番目は「景観を作る（創出する）」、二番目は「景観を残していく（凍結保存する）」、三番目は「生かしていく（動態保全する）」という立場です。

景観を考えていく上では、この三つの立場で考えていくのが分かり易いのではないかと思います。

まず、一番目の「景観を作る」という立場です。

例えば、多くの場合、景観に配慮するという形で、農業水路に石の堰堤を築いたり、護岸を人が水に触れやすいよう、石積みに整備したり、更には、コンクリートを木に見立てて使用するなど、従来、景観を作るという中では、あちこちで行われてきた手法の一つではないかと思います。

しかし、正直に言うと、こういうことに対しては大変批判的です。更に、こういうものを常々見てくると連想することが一つあります。

それは、マリー・アントワネットという王妃の話です。

時は十八世紀のフランス。ルイ王朝の時代に建てられたヴェルサイユ宮殿という非常に大きな宮殿がパリの郊外にありますが、そのヴェルサイユ宮殿に嫁いできた王妃がマリー・アントワネットです。

彼女は、ハプスブルグ家という、今ではオーストリアにあたる場所から、ルイ十六世に嫁いできました。当時のルイ王朝の非常に華やかな文化に田舎育ちのマリー・アントワネットは中々馴染めませんでした。

このため、宮殿の一角に、「プチトリアノン」という田舎の東屋を模したような庭を造り、農民を宮殿の中に呼び、ブドウや野菜を作らせたり、家畜を飼わせたりしました。

しかし、これはすべて偽物の農村です。何らヴェルサイユの土地とは関係ありません。

ヴェルサイユから北西に行くと、ノルマンディー地方があります。

このノルマンディー地方にあるような家を模してわざわざ作ったのです。

マリー・アントワネットは、毎日のようにここに出掛けて行ってはのんびりと景色を眺めたり、親しい仲間とお茶や音楽を楽しんだりしたといいます。

プチトリアノンは世界遺産にも指定されているような、非常に有名な庭園です。

しかし実は全部作り物で、その土地にある風土や文化と無関係に造営されたという意味にあっては、先ほど見ていただいた事例と非常に近いものがあると思います。

先の事例も、その土地の風土や文化と殆ど関係なく作られたものです。

低地の水田地帯であれば、そこで石は産出しません。そういう所にわざわざ石を持ってきて護岸を固めたり、本来だったらコンクリートなのに、それを木のような姿にしてみたり、簡単にいうと、これはすべて嘘と言っても過言ではないでしょう。

偽木で固めてしまったり、石積みの護岸を作ったり、それが元々その土地にあるものだったらまだしも、何ら関係なく、何となくそうすると景観がよくなるのではないかといった考えのもと、様々な景観整備を行うという話はいかがなものかと思います。

更に、これらの事例から連想するものは、ディズニーランドです。羽田空港から車で二十～三十分の距離ですが、元々ここは漁村だった場所です。東京湾で漁をする漁師さんの住む浦安の漁村だったところを埋め立て、おとぎの国が作られています。

集落の方にお話される
横張団員

プチトリアノン

これも、漁村であったという土地の履歴とは全く関係なく、テーマパークを作ってしまったという事例です。

ディズニーランドは、この不況の中にあっても、まだまだ入場客が伸びている一大観光地です。

農村にあっても、土地のものと全然関係ない施設であっても、たくさんお客さんが来てお金を落としてくれるなら別にいいじゃないかと言う立場もあるかもしれません。

しかし、こうした観光に走ってしまうという話は、元々その土地にあった農業とはどうしても矛盾してしまいます。

また、特に観光ということを考えると、都会の人は、とにかく色々な違った催しや新しいものを常に求めますから、結局それに振り回されてしまうことになります。

現にディズニーランドにしても、毎年のように新しい施設を作ったり、色々なイベントを行ったり、常に新しいものを観光客に提供することによって、客を集めてきた訳です。

更に、観光に走った場合、そういうことを誰が担うのでしょうか。

観光を目論むと、常に新しいものを求める客に対して、新しいものを提供し続けなければならなくなります

それには当然お金がかかりますから、そのための費用を誰が負担するのですかといった問題も出て来るでしょう。

常に都会の人に来てもらうために新しいことをしなければならなくなって、自分達は何のためにこんなことをし始めたんだろうと、非常に反省しているケースもあります。

景観が整備された農村に都会の人がやってきて、結果的に、都会の人がいいなと思うことはいいでしょうが、都会の人に来てもらいたいから何かをするということになると、実はこういう問題に直面してしまうことになると思います。

景観を作るという立場の中で、特に観光を考えることは、とても慎重に考える必要があると思います。

次に二番目の「景観を残していく」という立場を考えてみます。

「景観を残す」というと、棚田などがしばしば景観的に優れている、だから残しましょうということになると思います。

例えば新潟県十日町市（旧松代町）の棚田などは代表的な例かもしれません。

また、和歌山県蘭（あらぎ）島（和歌山県有田川町）の棚田も独特な形をしているため全国的にも有名で、写真家が大勢来ています。

こういった例を見ていると、連想するものがあります。それは日本庭園です。

同じように植物を主体に作られていて、歴史的な価値があり、それが現代までずっと継承されているという意味で、日本庭園などは非常に近いイメージとして考えていいのかもしれません。

しかし、農村では農業が営まれています。

農業が営まれているということは、その時代時代に暮らしてきた人々の農業の営み方や技術の進歩によって形が変わっているはずです。

庭園のように、形がずっとそのままであることはありません。

新潟県十日町市（旧松代町）の棚田

和歌山県蘭島の棚田

例えば、ある時期、ある作物が非常に売れるとその作物を一生懸命作りますし、時代が変わり、違った作物が売れるようになると、また作物が変わります。農業技術も当然進歩しますから、それに従ってやはり形が変わります。

残すという立場は、なるべく形を変えたくない。

しかし、農業が営まれているということは、形は必然的に変わるものであり、そこに矛盾が出てくることになります。

先に挙げた棚田を例にあげるなら、現代の技術をもってすれば、何もこんなに小さく何枚にも分かれた田んぼを作る必要はなく、矩形の大きな田んぼに整備することだって出来る訳です。

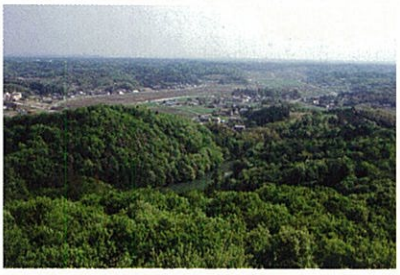
里山もまた、時代とともに変化する景観を考える上で格好の場です。

里山はかつて炭を焼いたり薪を採ったりという使い方をしてきた林で、関東地方なら十五～二十周期で伐採されていたため、明るい林であるケースが多いです。

里山を舞台とした有名な映画に、宮崎駿監督の「となりのトトロ」があります。埼玉県の狭山丘陵を舞台に、さつきとめいという姉妹が、森の妖精トトロに出会って色々な話が展開されるという映画です。

今、関東に住む人の多くは、まさにこれが里山だと思い浮かべます。そして、里山を守るというと、つまりこういう林を守ることだと考えるケースが多いです。

ところが、昔を振り返り、里山がかつてどういうところだったかを、地元の高校の先生が研究しています。



埼玉県狭山丘陵

その研究成果によると、里山の多くは茅場でした。

かつては、屋根を覆い家畜の敷きわらとするため、多くの茅が必要でした。そのため、茅場や草地が大変多かった訳です。

トトロの中に出てきたような森林は、実は、当時は山腹の斜面にあるだけで、面積からいうと、むしろ茅場よりも少なかったのです。

もし、江戸の末期から明治の頃にさつきとめいがいて、トトロに会おうと思ったら、むしろこの茅場の辺りにトトロはうろうろしていたかもしれません。

後に、茅の需要がなくなるにつれ、茅場は放置され、森林に替わっていきました。

今はその殆どを森林が覆っています。

それを私たちは里山だと思って、そこにトトロがいると思っている訳です。

このように、人の使い方や技術の進歩に伴って、常に農村の景観は変わっています。

変わっていくものを冷蔵庫に放り込むようにして凍結的に残すというのは、そこで農業が営まれるということと矛盾が生じてしまうケースが出てきます。